

## 嶺南・黒河（くろご）川口無谷～岩籠山

--- 3つの滝を越えて頂へ ---

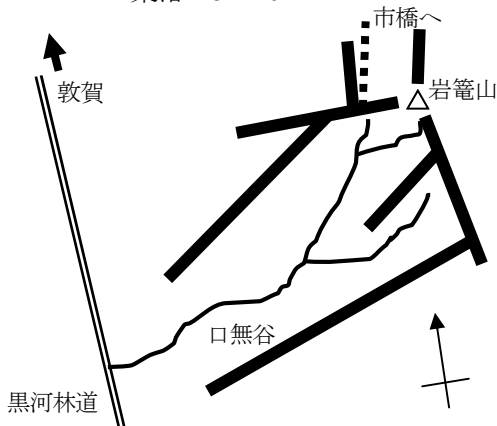
(CSS山行)

秋田 誠（彷徨倶楽部）

日 程：2011年8月7日（日）晴れ

参加者：L 秋田誠、SL 谷内資康、鹿士真弓（彷徨倶楽部）、北村昌文（湖南岳友会）、  
谷内里美（滋賀山友会）

タイム：入溪 7：25 --- 第1の滝 7：35～7：50 --- 第2の滝 7：50～8：40 --- 第3の滝  
9：55～10：05 --- 二俣（標高400m）11：30 --- 岩籠山 13：40～14：20 --- 山  
集落 15：40

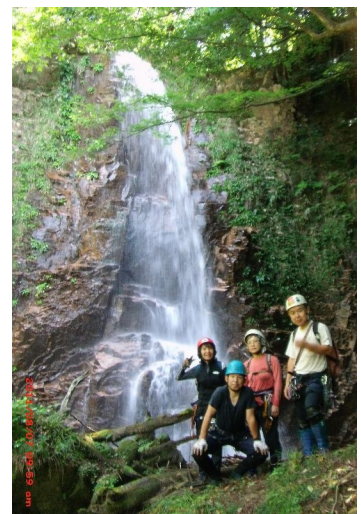


黒河（くろご）林道に架かる橋をくぐって入溪。地図から口無谷の下半部には3つの滝記号が読み取れる。地図に載る位だから余程立派な滝に違いない。知らない谷を登るとき、いつものことながら、どんな滝だろう？登れるかなあ？シャワークライムになるだろうか？胸がわくわくドキドキする。

しばらくは穏やかな流れ。兩岸の樹木から伸びた枝が谷を薄く覆って、肌を刺す真夏の陽射しを丁度良い具合に和らげてくれる。上流で陽をたっぷり浴びているのか、水は生温い。10分ほどで広い釜を持

つF1（直瀑 15m）登場。3つの滝の1番手である。口無谷の三男坊と云うところか。兩岸は手掛かりのない垂壁で直登は無理。落石に気を遣いながら右岸の急なガレに取り付く。滝の落口と同じ高さまで登ると、岩が門のように屹立している。岩の間をすり抜け、灌木を手掛かりに滝の上に降り立った。

第2の滝（15m）も同じく立派な釜の奥に鎮座していた。滝の傾斜は手頃で、右岸の水流沿いに登れそうだが、逆相の岩で手掛かりが乏しそう。慎重なクライミングを強いられそう。口無谷のやんちゃな次男坊である。釜の中に入り胸まで浸かって取り付かねばならない。5人で登るには時間がかかりそう。会の山行で市橋から登って来る伊東さんに山頂で会いたいと思っていたので、ここはあっさり左岸のルンゼを登って上流に出ることにした。高巻きと云えども、ルンゼは急で岩は濡れてホールドも細かい。安全のためアンザイレンした。出だしの浅いクラックにカムを効かせ、北村さんに確保をお願いして登り始める。細かいホールドを拾って急な岩溝を10mほど登ると被った岩に抑えられるので、左にトラバースして、胸がつかえそうな草付きに移る。足場が崩れ易い嫌な登りだが、うまい具合の間隔で生えている灌木が登攀を助けてくれた。登り着いた所は谷を見下ろす広々とした台地だった。



口無谷大滝（20m）

第3の滝（口無谷大滝、直瀑 20m）は岩壁を裁ち割るように、豪快に水を落としていた。落水の一部は滝の下で岩に砕けて美しい水しぶきをあげていた。木漏れ陽が岩の舞台上で踊る水滴たちをきらきら輝かせていた。この滝は3つの滝の中で最も豪快で、落差も一番大きい。まさに口無谷の長男の風格をもつ滝であった。しかし、高巻きは他の2つの滝よりずっと容易で、左岸の急な草付きから太い灌木を伝って簡単に滝の上に出ることが出来た。優しい長男坊だった。



美しい滑滝を越えて

第3の滝の上流で谷はすっかり穏やかな流れとなり、時折美しい滑滝が現れて私たちを楽しませてくれた。左岸に林道の跡らしい石垣を見て進むとやがて二俣（標高400m）となった。左俣に入ると、なおも5m前後の滝が次々に現れた。上の二俣（標高580m）で谷を右に拾い、ほとんど藪こぎもなく、インディアン平原を真近かに見下ろす岩籠山の南ピーク付近の稜線に出た。インディアン平原の露岩に登山者が憩っていた。岩籠山の山頂に向かったが、伊東さんたちは既に下山したようで会うことは出来なかった。

岐路は口無谷の右俣を下り、二俣付近から左岸の林道を使うつもりだった。しかし、二俣までの長い沢下りが億劫になり、夕暮山を経て山集落に下る登山道を利用した。

#### <一口感想>

- そんなに大きな谷ではなかったですが、綺麗な滑、高巻き、最後の藪こぎなど、色々な要素が詰まった沢でした。特に高巻きは見た感じよりも手強かったです。藪こぎでは、多分最初の少しの方向の違いで、当初の目標とはかなり違った稜線に出てしまいましたが、まあ、そんなものでしょう。お天気に恵まれ、岩籠山からの展望も結構でした。（北村）
- 癒しの沢でほっこり和み、気分爽快でした。疲れている中、谷内さんには車を取りに行ってもらい、ありがとうございます。楽しい一日をありがとうございました。（鹿土）
- 口無谷は以前雨のため入渓地点を確認しただけでずっと気になっていた沢でした。綺麗な沢でしたが滝の高巻きが厳しく、往生し、無駄な時間をとり、反省しています。近くのうつろ谷に比べると遡行距離が長く、日帰りにはちょっとハードな沢登りとなりました。（谷内）
- 今回の山行を終えて、登り甲斐があるとされる嶺南の3つの谷（うつろ谷、雲谷川、口無谷）を総てトレースしました。どの谷も山の標高が低いのでスケールはありませんが、滝登り、高巻き、谷筋のルート判断と沢登りの要素がほど良く揃っており、沢のリーダーを養成するルートとして手頃だと思います。早朝発てば、大津市内から日帰り出来るので、登山教室やCSSで活用すると良いでしょう。（秋田）